

各地で話題の病害虫

キウイヒメヨコバイ (仮称)

学名: *Typhlocybae* Gen. et sp.

平成3年8月に神奈川県小田原市の一部キウイフルーツ園で種名不明のヨコバイの被害が発生した。埼玉大学の林正美氏が同定依頼したところ、ヒメヨコバイ科の新種であることが明らかになり、和名をキウイヒメヨコバイ (仮称) とした。

成虫はチャノミドリヒメヨコバイに似ており、



神奈川県病害虫防除所 牛山欽司氏提供

体長3~4mm、雌は黄白色で、雄の前翅には緋紅色の斑紋がある。

寄主植物はキウイだけで、他の植物への寄生はこれまで認められていない。発生経過はキウイ枝の芽基部に産付けられた卵で越冬し、翌年4月にふ化した幼虫は、5齢を経て成虫になる。

成虫は年4回程度発生するものと見られており、5月頃から12月の落葉時まで見られる。被害は、成虫と幼虫が葉裏に寄生して吸汁加害して、葉全体が白くかすり状となって光合成が阻害される。

発生拡大を防ぐため、発生園からの採穂や苗の導入はしないことが大切である。本虫の殺虫剤に対する感受性は比較的高いようである。

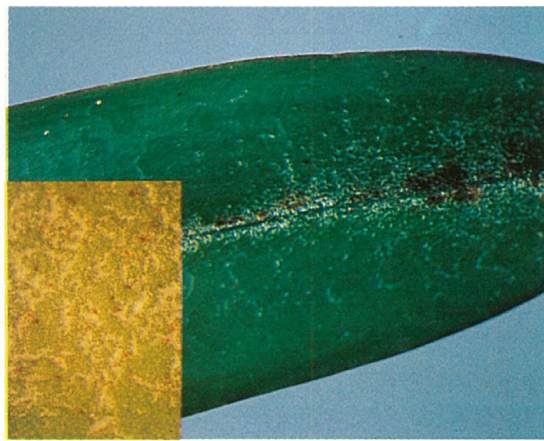
ランヒメハダニ (新称)

学名: *Tenuipalpus pacificus* Baker

英名: orchid false spider mite (新称)

平成3年に三重県で温室栽培されているコチウランとデンドロビウムからわが国未記録種のヒメハダニが発見され、鳥取大学の江原昭三氏らによってランヒメハダニ (新称) であることが判明した。

本種はラン類の有害ダニとして世界的によく知



三重県農業技術センター 大久保憲秀氏提供

られており、東南アジア・豪州・南アメリカに分布し、ヨーロッパでは温室栽培のランに発生している。体色は赤橙色、触肢は3節単純型で爪はない。前胴体部は極めて幅広く、後胴体部は狭くなっている。雌成虫の体長は0.34mm、雄は一回り小さく0.30mm程度である。

本種は体が微小であるため、早期発見が困難であり、被害に気付いた時はすでに寄生密度がかなり高くなっている。被害は本種の吸汁によって、葉面が陥没して凸凹になり、凹部は不定形に白化することが多い。また、寄生密度が高まると葉先や葉身のつけ根付近が白化し、最終的には黄化して落葉する。発生生態及び防除については不明な点が多く、今後の研究が待たれる。

キュウリの萎ちょう症状

ウイルス名：CMV、WMV、ZYMV

平成元年9月に神奈川県抑制キュウリ栽培地帯に激しいしおれ症状を現す株が多数みつかった。この症状は、収穫が始まる9月下旬頃から見られ、10月上旬には、ハウス全体に急速にまん延し、大きな被害を出している。

この原因を神奈川県園芸試験場が調査した結果、これまで知られているキュウリモザイクウイルス(CMV)やカボチャモザイクウイルス(WMV)のほかにズッキーニ黄斑モザイクウイルス(ZYMV)が関係していることが明らかになった。



神奈川県病害虫防除所 牛山欽司氏提供

ZYMVは長さ約750nmのひも状粒子で、キュウリへの単独感染は品種間差が見られるが、CMVやWMVに見られるようなモザイク症状を呈し、萎ちょう症状は軽いものが多いが一般的である。

今回のようにCMVやWMVと重複感染すると激しい萎ちょう症状を現し、枯死する株も現れるほどである。この症状は、自根栽培のキュウリには認められないが、ブルームレス(白い粉状物のない)カボチャ台木の普及に伴い各地で発生しているようである。

防除手段として、ZYMVは他のウイルスと同じようにアブラムシにより媒介されるので、寒鈴しゃなどで有翅アブラムシの侵入を防止するとともに薬剤を散布する。

マンゴウかいよう病

学名：*Xanthomonas campestris*
pv. *mangiferaeindicae*
英名：bacterial canker of mango

昭和60年頃から沖縄県宮古島の一部に栽培されているマンゴウ(品種：アーヴィン)の葉や果実にかいよう症状が発生し、調査した結果、マンゴウかいよう病であることが判明した。本病はインドや台湾で知られているが、わが国で発生が確認されたのは初めてのことである。

病徴は、葉に暗黒色の小斑点を生じ、後に斑点の表面が盛り上がりコールタールが付着したような黒色病斑になり、激しく発生すると葉柄まで病斑が広がり落葉する。枝幹では、はじめ暗褐色の



沖縄県営農指導課 上原勝江氏提供

小病斑をつくりや二を出し、病勢が進むと亀裂を生じて木質部が露出する。本病により成木が枯死することはないが、生育が抑制され着果が悪くなる。また、果実では暗黒色の小斑点を生じ、病斑は融合し陥没して亀裂を生じ、商品価値を著しく低下させる。

伝染方法は、古い葉や枝幹で越冬した病原細菌が雨によって伝搬され、風害などによって生じた損傷部から侵入して発病する。発生は周年見られ、気温の上昇とともに発生が増加し、特に春先に雨が多いと発生が多くなる。

防除対策として、り病枝幹の切除や病葉を除去して伝染源を無くすことが重要で、雨よけ栽培も有効である。